

303 子宮体癌における傍大動脈リンパ節転移の検討

北海道大

晴山仁志, 蝦名康彦, 八重樫 稔, 山本 律,
藤野敬史, 櫻木範明, 牧野田 知, 藤本征一郎

【目的】子宮体癌の傍大動脈リンパ節(PAN)転移を規定する病理組織学的因子を明らかにし, 予後推定のためのPAN郭清の意義について検討する.

【方法】骨盤リンパ節(PLN)およびPAN郭清を含む根治手術を施行した子宮体癌187例について, PAN転移と臨床進行期(FIGO, 1983), 組織型, 組織分化度, 核異型度, 脈管侵襲, 筋層浸潤, 頸部浸潤, 付属器転移, PLN転移ならびに予後との関連性について検討した.

【成績】PAN転移は8.6%(PAN+PLN転移:7.5%, 単独PAN転移:1.1%)に認められ, 閉鎖節の次に転移頻度が高かった. 臨床進行期別のPAN転移率はI期4.6%, II期16.3%, III期33.3%であり, II期がI期($p<0.05$)よりも, III期がI期($p<0.05$)よりも有意に高かった. PAN転移は組織型(内膜型腺癌または腺棘細胞癌の群とそれ以外の群)($p<0.01$), 脈管侵襲($p<0.001$), 筋層浸潤($p<0.05$), 頸部浸潤($p<0.001$), PLN転移陽性($p<0.0001$)とそれぞれ有意に関連を認めたが, 多変量解析では脈管侵襲とのみ有意($p<0.05$)の関連性が示された. PANの転移部位は片側性で下腸間膜動脈の上部に多く, しかしPAN転移とPLN転移の片側性・両側性別, 部位数, 総腸骨節転移の有無との関連性は認められなかった. 累積生存率の検定ではPAN+PLN転移群は, PLNのみの転移群よりも有意($p<0.01$)に予後不良であった.

【結論】子宮体癌のPAN転移は頻度が高く, PLN転移からの二次的な転移のみではなく, 独立して発生すること, すなわち脈管侵襲が主要なその因子であることが解明された. PAN転移とPLN転移の確認は予後を推定する上で極めて有用であることを明らかにしえた.

304 子宮体癌における骨盤リンパ節・傍大動脈リンパ節転移に関する臨床病理学的検討

弘前大

佐藤重美, 福士義将, 横山良仁, 丸山英俊, 齋藤良治

【目的】子宮体癌の骨盤リンパ節(PLN)・傍大動脈リンパ節(PAN)転移について臨床病理学的に解析した. 【方法】1980年1月から1995年9月までに当科で取り扱った子宮体癌101例のうち, PLN廓清およびPAN廓清または生検を施行した54例を対象とし, 臨床進行期別・組織型別のPLN・PAN転移頻度, ならびにこれらリンパ節転移を起こす危険因子を検討し, さらにこれらリンパ節転移の有無による予後の違いを調べた. 【成績】1) 臨床進行期I期ではPLN転移率とPAN転移率がともに12.1%(4/33), II期ではPLN転移率とPAN転移率がともに30.8%(4/13)であり, またIII期ではPLN転移率は50%(4/8), PAN転移率は37.5%(3/8)であった. 2) PLN転移陽性12例中では7例(58.3%)でPAN転移を認め, 一方PLN転移陰性42例中では4例(9.5%)でPAN転移を認めた. 3) PLN転移部位あるいはPLN転移部位数とPAN転移との間に関連は認められなかった. 4) 病理組織型全体としてはPLN, PAN転移頻度に有意な関連は認められなかった. しかしG3型腺癌ではG1型腺癌に比べPAN転移が有意に高率であった. 5) 筋層浸潤1/2以上, 脈管侵襲陽性, LDH5高値の各因子が有意にPLN・PAN転移の陽性率と関連した. 6) リンパ節転移陰性群の5生率は89.9%であったが, リンパ節転移陽性群の5生率は60.0%で, 後者で有意に予後不良であった($p<0.005$). 7) さらに, PAN転移陽性群とPLNのみ陽性群で5生率を比較すると, 前者で44.4%, 後者で80.0%であり, 前者で有意に予後不良であった($p<0.05$). 【結論】子宮体癌では, PLN廓清とともにPAN廓清が必須であることが示され, PAN転移の有無の検索は予後判定に重要であることが示唆された.